

I. ホスピス緩和ケアを支えるボランティア活動

8. 総合病院における緩和ケア病棟ボランティア

—山口赤十字病院の取り組み—

橋 直子* 前田 のぞみ**

(山口赤十字病院 医療社会事業課* 同 緩和ケア科**)

はじめに

山口赤十字病院（以下、当院）は、がん診療連携拠点病院の指定を受けた475床（一般：400床、NICU：15床、緩和ケア病棟：25床、回復期リハビリテーション病棟：35床）の総合病院である。

当院のボランティア活動は、約30年前、患者が清拭に使用するタオルをロール状に巻く活動から始まった。現在、ボランティア登録人数は96名であり、その構成は主婦、会社員、学生など多岐にわたり、年代層も幅広い。活動内容は、「タオル巻き」「音楽（外来ロビーでの朝のピアノ演奏、コンサート企画運営など）」「移動図書」「ボランティアグッズ作り（帽子・ベッドサイドポケットなど）」などである。緩和ケアボランティアは、それらの活動のひとつとして現在29名（2009年12月末現在）のメンバーで展開しており、ここではその活動の実際と課題について述べる。

緩和ケアボランティアの活動目的は、患者とその家族の伴走者として“社会の風”を入れることである。緩和ケア病棟は患者と家族にとって生活の場であり、そこにおけるQOLを向上するためには職員とボランティアメンバー（以下、メンバー）がチームを組んでケアに当たることが不可欠である。

登録と研修

ボランティアの募集は、原則的に現メンバーの紹介で人材を確保している。なかには、病院ホームページでボランティア募集案内をみて問合せを

する方もあり、その都度コーディネーターが対応している。

ボランティア希望者は、新規登録研修の受講と個別面接の後、登録手続きを済ませてから活動に参加する。新規登録研修会では緩和ケアの概論、病棟でのボランティアの役割や患者らの特徴、5つのルール（表1）に基づく活動の心得について講義を行っている。年1～2回開く継続研修会では、メンバー全員が会して活動についての意見交換を行う。また、院外講師による講演会も実施している。

活動の実際

① 院内での活動

各メンバーの活動は月2回を原則とし、個別の希望に沿ってコーディネーターが月間スケジュールを立てる。実活動は2時間である。活動開始前に申し送りにてコーディネーターからその日の患者や家族について情報提供をする。終了後には活動内容を振り返るミーティングを行い、患者や家族の反応や要望をメンバー間で共有し、次の活動に反映している。実際の活動内容は、表2の通りである。定期的な活動のほかに、病棟行事では職員と協力して活動し、企画の段階から関わることもある。

ボランティア活動では、患者や家族が病室に居ながらにして日常生活の潤いを感じてもらえるようさまざまな工夫や配慮が必要である。

たとえば、ティータイム活動では手作りのメニュー表をもって各病室を訪問し、患者や家族か

表1 緩和ケアボランティア5つのルール

ルール1	<p>〈守秘義務〉</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 院外では、病院内での出来事を一切話さない ・ 特に、患者の氏名を口外することは厳禁
ルール2	<p>〈ケアチームの一員として行動する〉</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ ボランティアとしての役割を認識する ・ 情報を共有する
ルール3	<p>〈活動についての約束を厳守する〉</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 登録された活動に時間厳守で参加する ・ 活動を休む場合には、早めに連絡する ・ やむをえない場合は、後日コーディネーターに事情を報告する ・ 活動前後のミーティングには必ず参加して、注意事項や活動内容をよく把握する ・ 病棟からの指示は厳守する ・ 適切な言葉づかいを心がけて、声の大きさや話す速さにも留意しながら関わる ・ ゆったりとした雰囲気を保てるよう配慮する
ルール4	<p>〈確認と報告〉</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 「迷ったら、やらない」活動についての確認を念頭におく ・ 活動での出来事はすべて報告する
ルール5	<p>〈自己管理〉</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 健康な心と身体でいられるように心がける ・ 活動時は、清潔で動きやすい服装、音のしない靴、香水やアクセサリーはつけず、化粧や爪にも十分配慮する ・ 心配事や困ったことなどがある場合には、いつでもコーディネーターに相談する ・ 親しい人と死別した場合は、しばらく活動を休止する ・ いずれの場合も49日忌までは活動休止とし、詳しいことはコーディネーターと相談のうえ決定する ・ 活動再開に際し、面接を行う

表2 緩和ケアボランティア活動の内容について

	活動名	頻度	人数 / 1回	活動の概要
一般ボランティア	ティータイム	2回程度 / 週	3～4名	各病室を訪問し、患者や家族の注文を受けて、飲み物と菓子を配達する。メニューはコーヒー・紅茶・煎茶・抹茶・ジュース・ココア。温・冷の両方あり
	生け花	1回 / 週	2～3名	花材の購入と小花瓶を使用した生け花アレンジメントを作成 各病室を訪問し、患者が好みの生け花を選択する
	花のケア	1回 / 週	1～2名	生け花や鉢物の水替えや手入れ
	園芸・環境整備	随時	1～3名	テラスの植物の管理 病棟内の清掃（床は業者が担当） 昼食の配膳
専門ボランティア	絵てがみ教室	1回 / 2カ月	1名	絵てがみ作成の指導
	園芸	1回 / 1カ月	2名	鉢植え植物の提供
	音楽	5回 / 年	1名	病棟コンサートでのヴァイオリン演奏
	カラー・コーディネーター	1～2回 / 年	1名	病棟内の物品のカラーを整理する 職員のパーソナルカラーの助言
他	病棟行事	随時（別途募集）	5～7名	事前準備 当日の会場設営と茶菓子での接待 患者の誘導

ら個別に注文を受ける。6種類の飲み物は、ホットとアイスの両方を用意し、患者らの要望に対応している。ティーカップは遺族から寄贈された綺麗な絵柄の食器を用いて視覚的な楽しみも提供している。また、飲み物の量や扱いやすさを考慮した食器の選定、茶菓子の準備なども各患者の症状やその日の体調に合わせて行っている。絶飲食の患者にも紅茶でのうがいやコーヒーの香りを楽しむなどの対応もしている。注文を受けた飲み物は、入浴や処置などの時間を見計らって患者が希望する病棟内の場所（病室、デイルーム、家族室など）へ配達する。衛生面では食器類や布巾の熱湯消毒や食品の管理について、メンバー間で確認をしながら行っている。

生け花活動では、季節感、花もちや香り、経済面を考えた花材選びからメンバーが担当する。室内の光の影響で黒く見える花や、葬儀・仏壇を連想させる花は避けるなど、花材の吟味をする。患者からはオレンジや黄色のビタミンカラーや淡いピンク色の花が好まれる場合が多い。高さ約10cmの花瓶にいろいろなアレンジで花を生けた後、すべての花瓶をワゴンに載せてベッドサイドまで配達する。患者はそのなかから自分の好みの生け花を選んでいる。入院中は「選択する」機会が少ないなか、花屋の雰囲気をお届け、患者自身が選ぶ楽しみも提供している。患者や家族がボランティアとともに花を生ける場合もあり、QOL向上にもつながっている。

ホスピス緩和ケア病棟で長期研修をする専門職（看護師など）の方には、研修プログラムにおいてボランティア活動の参加を位置づけている。このことは、研修生にとって患者や家族の視点に改めて気づかされたり、“ホスピスマインド”の確認になったりしているようである。メンバーにとっても、自分たちの活動を伝えることによって振り返るきっかけになる。また、研修生からのコメントは活動の励みにもなっている。

② 院外での活動

緩和ケアボランティアの活動について、院外機関からの視察研修に応じて意見交換や活動の実際を見学してもらうこともある。また、日本病院ボ

ランティア協会中国地区研修会（山口県周南市）「求められる病院ボランティア」での口演（2005年6月）や、第29回日本死の臨床研究会（山口市）でのポスター発表「山口赤十字病院緩和ケア病棟におけるボランティア活動」（2005年11月）を行ってきた。

ボランティア活動におけるリスクマネジメント

1. ボランティア保険の登録

ボランティア登録後には日本赤十字社のボランティア保険（保険期間は1年間）に加入し、活動に伴う傷害事故や賠償事故に備えている。保険料は、病院が負担している。

2. ボランティアコーディネーターの存在

医療ソーシャルワーカーと音楽療法士の2名でコーディネート業務を行っている。活動内容の調整やスケジュール管理、研修の企画・実施、ボランティアの個別面接、職員との橋渡し役などを担い、ボランティア活動が円滑に運営されるよう配慮する。活動内容の改善においては、メンバーの活動に対する気づきや、要望に基づいて出された提案が実際の活動へ活かされるように「ボランティアでできること・できないこと」について管理の点や活動がケアの一端を担うという点を考慮した支援をする。

“緩和ケアボランティアは誰でもできる活動内容だが、誰でもよいわけではない”という意識をメンバーと共有し、個々の背景や性格、資質を見極め、チームケアとして適切に活動できるよう声かけや面接を行う必要がある。また、メンバーのプライベートな出来事により活動継続が困難になった場合には、個別面接を行い、活動の休止あるいは活動頻度や内容の変更を共に考えている。

3. 活動における申し送りとミーティング

スムーズな活動には、情報の共有が不可欠である。コーディネーターは患者や家族、また職員から情報収集を行い、申し送りでは患者らのその日の療養生活上の妨げになることや、不快感を与えることのないようアセスメントした内容を伝える。メンバーは適切な活動につながるように情報を正確に把握し、活動の最中も確認を繰り返すこ

とが重要である。

4. チーム医療の位置づけ

身体症状が緩和した患者がボランティアのティーサービスで寛ぐ様子や、病室に届けられた生け花を眺めて思わず笑顔になる姿には、ボランティア活動の有効性を痛感する。患者や家族を一生活者と捉えた場合、職員ではないボランティアの存在そのものに意味がある。ボランティアは、患者や家族の側にそっと寄り添いながら、ゆったりとした時間と空間を提供する役目を担っている。

今後の課題

1. 質の継続

患者や家族からの一言や小さな反応を大切に受け止めること、毎回の活動を丁寧に振り返ること、定期的な活動の見直しなどを積み重ねることが活動の質の維持、向上に繋がると考える。職員との連携を図り、常に患者や家族の要望や状況に沿った活動ができるようにメンバー各自が心がけることが重要である。

2. 個別的な事情に応じたメンバーの調整

メンバーの体調不良や急用で活動が難しくなった場合、十分な活動ができるようメンバーの補充や活動の内容変更を行っていくことが求められる。メンバーの活動可能日が限られるため調整が不十分な場合もあるが、“ボランティアグループ”という帰属先の存在そのものがメンバー自身のQOLに役立っていることもあり、その都度の調整によって柔軟な対応を心がけたい。

3. 活動メンバーの人材確保

メンバーの高齢化や、さらなる活動内容の充実に伴い、新メンバーの確保が急務である。院内でのポスター掲示やホームページにより、幅広く興味・関心を寄せられる方を募りたい。しかし、前述したように、緩和ケアそのものの理解やチームの一員として動くスタンスの確立、活動のルールなどを踏まえたうえで参加してもらえるよう育成していく作業も併せて必要である。これには現メンバーの協力も欠かせず、実際の活動場面で継承されていくことが何より効果的であると考えている。